第４２回日本のうたごえ全国協議会総会

方針

はじめに

〜つながろう　ここには居場所がある　つながろう　ここにはみんながいる　あきらめない今このときを　ささえあうあたたかなきもちにこころからありがとう…。

首都圏青年ユニオンから生まれたこの歌「ありがとう」が、年越し派遣村の輪と重なる。

大企業の、減産・減収を理由にした〝派遣切り〟で年の瀬に職も住むところも追われた人たちのいのちがあぶない、と労働組合、民主団体・市民等２０団体が急遽開設した年越し派遣村（東京・日比谷公園）には、主催者の予想を大きく上回る５００人が援助を求め、のべ１７００人のボランティアが参加した。

〝村〟は、避難してきた村民の対応を国に迫り、厚生労働省の講堂を開放させ、この事態をまねいた労働者派遣法の見直し国会審議を迫るなど、集まった民の力が国を動かすことを示した２００９年の年明けとなった。

支援に入ったうたごえのメンバーの「闘うわれら」「あきらめない」「故郷」などの歌声は、まさに寒風の中のひだまりとして受け容れられた。村ではコンサートやフィルム上映なども行われ、集う人々の心をつなぐ歌・文化が求められていることがここでも示された。

しかし、３月までに解雇される非正規労働者数の見込み８５０００人も氷山の一角であり、このまま大企業の不法な「労働者の使い捨て」を許せば、非正規労働者から次は正規労働者の首切りが始まることは必至だ。働き、生きる権利を求める声をつなぐうたごえの役割は今、ますます求められている。

日本の政府、大企業の利潤追求至上主義の新自由主義は、私たちの暮らし全般に様々な歪みを生んでいる。労働者の大量首切り強行、戦後の復興を支え、今、高齢者を迎える人たちの「年金」削減、「後期高齢者医療制度」でセーフティネットから排除し、「自立支援」と称して障害者を作業所からも追い出す。新しいいのちを産みだそうとする母親は病院をたらい回しにされ、あげく命を落される。「努力が足りない」と高校生は学ぶ権利を奪われ、危ない輸入食品を食べさせられる。

この流れは、文化活動にも及び、オーケストラへの助成金削減、文化・スポーツ施設の廃止が大阪をはじめ全国でおきている。また、低賃金、長時間労働、加えて職が奪われる中、「健康で文化的な最低限度の生活を有する権利」（憲法２５条）は、著しく狭められている。

「自己責任」という言葉の前に、孤立し、あきらめ、刹那的・衝動的な犯罪の多発も、その責任は、それらの状況を作り出した政治にあり、「政治災害」であることを押さえていく必要がある。

私たちは健康で文化的な暮らしを望む。それは平和な社会において実現する。軍事費を削って福祉・教育に、政府は「国をまもるための軍事費」と言うが、米軍基地があるがゆえの相次ぐ事故・事件、漁民を殺したイージス艦の事故を見ても、政府の視線を、私たち国民の暮らしに向けさせなくてはならない。そのためにも憲法九条をまもりいかす世論を大きく広げていくことが求められる。

憲法九条の２項を変えることを意図した憲法「改正」の動きに対して、８０００近くの「九条の会」が生まれ、日本の憲法九条が世界の平和の羅針盤として、国を超えて九条をまもりいかそうという声と運動が広がっている。それを示したのが、５月の〝９条世界会議〟だった。これも

主催者の予想を大きく超え、幅広い共同で成功した。世論調査では、「変えない方がよい」が６６％（『朝日』０８年４月８日）、５４・５％（『読売』０８年５月３日）と九条改憲支持が減っている。

ノーベル賞を受賞した益川敏英さん、元プロ野球選手の張本勲さんなど著名人の核兵器廃絶や平和への発言も数多く見られる。

「ゆたかな地球で、人間らしく生き続けたい」という人類共通の願いが、人種や宗教,思想信条,所属する団体や企業の枠を越えて,大きな世論をつくっている。

世界の動きを見ても、新自由主義の、アメリカの力による一国支配が揺らぎ、それに組しない平和共同体がカリブ海を含む中南米諸国、アジア・ユーラシア諸国に確立し始めている。

初の黒人アメリカ大統領の「ＣＨＡＮＧＥ」「ＹＥＳ　ＷＥ　ＣＡＮ」のことばは、多くの人々に変革への希望を与えた。年末年始から伝えられるイスラエルのパレスチナ・ガザ地区攻撃への抗議も世界で起き、平和と自由を求めるうねりは地球を包もうとしている。世界平和への保障、核兵器廃絶へ、２０１０年春、核不拡散条約（ＮＰＴ）再検討会議成功へと大きく広がっている。

「うたごえ創立６０周年に向かう運動」は、２１世紀を憲法の精神が花開き、いのち輝く世紀に、生きる力の音楽文化が豊かに発展する世紀にしようと5カ年計画をもって、活動を進めてきた。

沖縄、広島、福井、奈良での日本のうたごえ祭典の成功に見られるように全国各地で大きな前進をつくりだし、それらの成果を総結集した「６０周年記念　２００８年日本のうたごえ祭典ｉｎ東京」（以下、０８年祭典ｉｎ東京）は、開催地東京をはじめ、全国の連帯の力で有明コロシアムを埋め尽くして大きな成功をかちとり、運動の新たな第一歩を踏み出すことができた。

０８年祭典ｉｎ東京が、世界的な金融危機と景気後退の大波を受けて、前述の「派遣切り」等異常な事態のなか、〝働くこと・生きることと平和〟の思いを高らかに響かせることができた背景を見る時、人間らしい暮らしを求める声と行動はいかに切実であり、その声を結ぶ活動が求められているかを示している。

「無関心」と「あきらめ」を克服し、人々をつなぎ、たたかう勇気と生きる希望をあたえる「うた」がいまこそ求められている。「うたごえは平和の力」「うたはたたかいとともに」「うたごえは生きる力」の旗を掲げ６０年を超えて活動してきたうたごえ運動はまさに出番である。

こうした社会の動きをとらえ、明日からの実践の方針を決めるために全国の英知を寄せ合いたい。

２００８年度　活動のまとめ

「みなさんが歌うときの笑顔と歌声、この光景を見て、この笑顔とうたごえが世の中を変えていくのではないかと感じました。韓国も貧困と格差社会で暮らしは大変です。しかし、みなさんはそういう人たちに笑顔とうたごえを届けて、ひとりで苦しまないでみんなで歌ってみんなで幸せになろうとしているのだと実感しました」。０８年祭典ｉｎ東京に参加した仁川・市民文化芸術センター代表イム・スングァンさんの言葉が今のうたごえ運動をよく表している。

方針〈1〉人々のねがいを結び、歌いつがれてきたうたを歌い、創り、「みんなうたう会」を旺盛に展開し、〝共に生きる町づくり・地域づくり〟のうたごえを広げる。

〔演奏・普及活動〕

運動６０周年の２００８年は、思いも新たに全国で旺盛な演奏・普及活動が繰り広げられ、その成果を持ち寄って０８年祭典ｉｎ東京を大成功させた。心を動かし、きずなを結ぶうたごえの活動は、多くの人々に生きる勇気と未来への希望をあたえ、「うたごえは元気だね」という声が各地で聞かれる状況が生まれている。

〈憲法を輝かせるうたごえ〉

０８年も憲法を活かし輝かせる演奏普及活動は全国で展開された。「県九条の会交流集会」に県うたごえ九条の会として７０人の演奏を成功させた千葉、地域九条の会の街頭宣伝行動に欠かさず参加してきた大阪うたごえ九条の会、大阪の９条世界会議の感動の中から結成された和歌山うたごえ九条の会、新たにうたごえ九条の会を立ち上げ独自の演奏も展開した埼玉など、「うたごえ九条の会」は新たな広がりを見せている。協議会単位やサークル・合唱団単位での九条の会関連のつどいでの演奏は全国で多数にのぼった。地域・分野の「九条の会」との共同の取り組みにも積極的に関わり、演奏や企画のプロデュース、運営などで成功に寄与している例も各地で見られる。

愛知では〝憲法フェスティバル〟で交響曲「五月の歌」を外山雄三指揮で大きく成功させ、０８年祭典＝東京へもつなげた。

〝憲法ミュージカル〟、〝憲法フォークジャンボリー〟も各地で取り組まれている。

幕張メッセをメイン会場に、仙台、大阪、広島で開催された９条世界会議は、主催者の予想を超える３万２千人の参加者で成功した。

うたごえは音楽九条の会とともに当初から実行委員会に参加し、幕張メッセではオーケストラによる９００人の「ねがい」の大合唱を池辺晋一郎氏の指揮で実現したことをはじめ、「第九」や様々なアーティストの出演、「９条ライブ」や展示、パフォーマンス部門の制作運営などに全面的に関わりその成功に大きく寄与した。大阪、広島でも、オープニングを飾る大合唱で成功の力となった。

広島から幕張までの〝９条ピースウォーク〟にも、各地のうたごえが積極的に関わった。

〈うたは闘いとともに・生きる力のうたごえ〉

全国で多発する労働争議、派遣切りなどに対して働くものを励ます歌を生みだし、歌い広げた。広島では〝誰もが人間らしく働きたい・スクラムコンサート〟を労働組合、争議団と共同で企画、成功させた。職場のうたごえは、毎年新しい創作曲を生みだし、働く現場からの思いを発信している。

０７年、関西合唱団が初演した「いのちをつなぐ人たちのうた」はその後、各地の演奏会や医療現場で医療従事者とともに歌われている。

非正規労働者の思いを歌にした「あきらめない」や「ありがとう」は青年雇用集会をはじめ各地で歌い広げられ、年末年始の〝年越し派遣村〟でも歌われた。

〝高齢者一揆〟では０８年祭典ｉｎ東京・高齢者のうたごえ実行委員会として大挙して演奏、各地でも高齢者のうたごえは活発になっている。

東京青空裁判原告団やアスベスト被害とたたかう土建組合などが歌を創り広げながら０８年祭典ｉｎ東京に参加するなど新たな広がりもつくった。

〈核兵器廃絶と平和のうたごえ〉

３・１ビキニデーでは、静岡のうたごえを中心に、墓参行進、ビキニデー集会で「海に生きたあなたよ」他が歌われた。

５０周年の国民平和大行進では、全国でうたごえが積極的に参加、行進参加者を力づけた。行進用の音楽テープ作成にも協力している。

原水爆禁止世界大会でも文化企画に関わり、広島では、世界の言葉で平和をうたう曲「平和」が海外青年代表とともに歌われた。

原爆症認定訴訟の闘いでも厚労省前などの座り込みをはじめ、各地で歌で励ましている。各地の６・９行動でもうたごえで参加している団体が増えている。

米原子力空母の母港化反対の横須賀全国集会で首都圏のうたごえが平和の歌を響かせた。

戦争展、平和のつどい、ピースコンサートなどを共同でとりくみ、成功させている例も多い。

〈地域・分野と結んだうたごえ〉

「歌いたい」要求が高まる中、うたう会、うたごえ喫茶、うたごえ酒場が地域や、自治体、高齢者運動、女性運動、医療生協、地域生協などとむすび、活発に取り組まれている。

北海道のうたごえは、財政再建団体となって２年目の夕張で、その実態を学びながらを夕張を励まそうと〝北海道のうたごえの古里・夕張シアター＆ミニコンサート・うた創り〟を開催、全道・全国からの参加者で地元の人にも喜ばれ、新しい曲数曲が生まれた。

合唱劇「カネト」の飯田公演、旭川公演は開催地の自治体、学校、民間企業などの協力と愛知のうたごえの連帯で成功し、地元紙でも大きく報道された。

映画「荒木栄の歌が聞こえる」上映会とうたう会の企画も各地で行われ好評。

〔創作活動〕

◆多くの人が〝こぞってうたえる〟愛唱歌を創りだす創作運動を活発にする。

０８年度も、全国創作合宿（２月岡山、５２人参加、持ち寄り曲・詩：４８、合宿で創作された曲・詩：３２）と０８年祭典ｉｎ東京・オリジナルコンサート（１１月東京、１９都道府県・１産別、３８団体参加、５６曲発表）を節目とする取り組みとともに、各地で旺盛な創作演奏活動が展開された。

創作合宿での笠木透さんのライブ講座は、創作運動の課題「何をどう創り誰に向かって歌い広げるのか」に正面から答える内容で、持ち寄り作品の講評も「本音」で迫るものであった。そんな中で、祭典を盛り上げる清酒「護九里」をテーマにした多くの楽しい作品、平和行進５０周年の新しい歌も創られた。開催地の岡山合唱団の奮闘、創作曲を歌い広げ、創り手を育てている大量参加の大阪Ｐｅａｃｅ　Ｃａｌｌ、北海道、兵庫、広島、九州からも初参加があり、各地で創作の新たなうねりがつくられるきっかけとなった。

オリジナルコンサートは、今までになく初参加の合唱団・個人が多く、全国創作合宿を軸に各地で創作の運動が浸透してきたことをうかがわせた。また、「使い古された言葉に頼らず、発想や目の付け所が新鮮で、切実感とリアリティのある生き生きとした作品」にもたくさん出会えた。

日本のうたごえ６０周年創作プロジェクトは、祭典運動をリードする創作曲を生み出そうととりくみ、首都圏青年ユニオンとともに「ありがとう」（ＫａＺｕＭｉ作詞、小島啓介作曲、山ノ木竹志補作）が創られ大音楽会で演奏、「今　東京に」（高野美代子作詞、大西進作曲）もオリジナルコンサートで発表された。

専門家との協力共同による作品づくりでは、「私たちが進みつづける理由」（キム・ロザリオ詩、堤未果訳詩、池辺晋一郎作曲）が６０周年記念曲として、０８年祭典ｉｎ東京をリードした。関西合唱団委嘱作品「レモン哀歌」（高村光太郎詩・西村朗作曲）、神戸市役所センター合唱団委嘱作品「いのちとこころと…」（金子みすゞ詩・池辺晋一郎作曲）などが初演された。

〈アコーディオンの活動〉

０８年祭典ｉｎ東京・記念音楽会での１００人を超えるアコーディオン・オーケストラの演奏を成功させたほか、演奏楽器として、伴奏者として、各地でアコーディオン奏者が活動している。

〈うたごえ運動６０周年記念企画～うたは歴史を刻む～「うたごえと日本の作曲家たちコンサート」〉

０８年は金井信（高島平コーラスララ・新座コーラス横丁・ギルドＱ・アンサンブルラークなど実行委員会）、大西進（足立ピースフラワー合唱団、合唱団いちばん星、コールかるがも）、藤村記一郎（ぐんま子どもの人権宣言合唱団）、林光（三多摩青年合唱団）、池辺晋一郎（神戸市役所センター合唱団）が開催された。

方針〈2〉合唱発表会を地方、産業別、全国とも活発にし、歌う活動の実際を交流し、学び合い、創造の前進をめざす場にする。

〔合唱発表会運動〕

合唱発表会は、秋田で数十年ぶりに開催され、群馬も数年ぶりの開催ができた。東北ブロック、関東ブロックの連帯の力も大きい。

毎年開催されている地域でも、うたごえ内の発表交流にとどまらず、幅広い音楽愛好家に呼びかけたり、共同の取り組みの中のプログラムに組み入れるなどの工夫が見られ、若者の演奏グループ参加を意識的に追求し、全国にも送り出す例が生まれた。

合唱発表会企画の中に０８年祭典ｉｎ東京の合同練習も取り入れ、祭典成功につなげたのも特徴である。

東京はブロック別の合唱発表会を祭典成功の柱のひとつに位置づけ、全１０ブロックが参加団体を増やし、４５団体増となった。

６地域で開催している愛知では「合唱発表会あり方懇談会」を持ち、改善を重ねながら着実に参加団体を増やしている。

産業別・階層別の合唱発表会は、教育、自治体、郵便、医療、国鉄、電通、私鉄、保育、港湾、青年が開催され、医療、国鉄、電通は昨年と比べて参加団体を大きく増やしている。

全体として１２４０を超す参加団体となり参加人数も前進することができたが、依然として少なくない県で未開催という課題も残した。

全国合唱発表会は合唱発表会６部門２３１団体、オリジナルコンサート１６グループ（３９団体）の参加で団体数、参加人数とも近年最高となった。鑑賞者もこれまでになく多く、学びあう意欲の表れともいえる。

同じ日に祭典音楽会や複数部門の開催、全国合唱発表会にふさわしい会場確保、運営体制、開催部門や人数規定など全国からの積極的な提案を受けながらさらに改善していく必要がある。

方針〈3〉地方祭典の全都道府県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画を持つ。

〔０８年日本のうたごえ祭典ｉｎ東京〕

様々な闘いや課題に向かってうたをつくり広げ、仲間を増やし、サークルを建設し、うたごえ新聞読者を増やし、幅広い音楽専門家・音楽愛好者や諸団体・労働組合などとの共同を広げて地域や産業別のうたごえ祭典を成功させ、全体として０８年祭典ｉｎ東京につなげていく取り組みが全国で繰り広げられた。うたごえサークルがないところ、小さいところでも連帯の力で祭典を実現した経験や産業別祭典を開催地のうたごえ祭典とジョイントで成功させた経験も含め「祭典運動」の意義を改めて確認できる１年となった。

祭典は、「夢と平和　かがやけ９条！　ＨＥＹ！　わっしょい祭典」のキャッチフレーズで、３つの音楽会と合唱発表会・オリジナルコンサートで、のべ１８０００人が参加し成功をおさめた。

今回の祭典では、祭典総監督池辺晋一郎氏の新曲「私たちが進みつづける理由」が祭典企画全体を貫く柱の作品となり、日本の現状を鋭く告発するとともに「憲法のこころをうたう」「世界に平和のメッセージを発信する」という祭典コンセプト実現の力となった。

９０００人が集った大音楽会は、「東京大空襲」「東京からのぞうれっしゃ」「お江戸のにぎわい」等「東京らしい企画」、うたごえ草創期の方たちの出演で、うたごえ６０年のあゆみがよく伝わった「うたごえの誕生」などが好評。また１０００人以上の女声合唱に代表される、大会場の条件を生かした大合唱の魅力も伝えることができた。６０周年記念音楽会は、６０周年記念として位置づけ、「交響曲　五月の歌」を中心に「私たちが進みつづける理由」、アコーディオン・オーケストラ、男声合唱等、現在のうたごえの音楽的到達を示した。ゲストのチェロ演奏は「荒木栄の思い出」で荒木栄、井上頼豊両氏の業績を偲ぶ場面ともなった。お江戸のにぎわいコンサートは多彩な演目で若手含む出演者も多く、久しぶりに祭典の中で〝郷土のうたと踊り〟独自コンサートを実現させ、この間の東京・関東による〝江戸やっこまつり〟の運動の成果を示した。

今回の祭典成功の要因は、開催地東京が祭典開催の意義をしっかりと討議し、あしかけ４年にわたる準備を積み上げてきたこと、一人ひとりの要求と自発性を大切に運営してきたこと、そしてうたごえ外のさまざまな運動の団体や人にかかわっていただけたことが挙げられる。また全国のサークル・合唱団が６０周年という節目を積極的に受け止め、それにふさわしい参加運動にとりくんだことが大きい。

〔地方祭典〕

毎年持ち回りでうたごえ祭典を開催している北海道、九州では、それぞれ初の苫小牧、佐賀で開催。いずれもうたごえの主体的力量は大きなところではないが、地元の専門家の協力も得、新たな広がりをつくった開催地の奮闘とブロックの連帯の力で大きく成功した。九州祭典では〝青年フェスタ〟も行われた。

千葉は〝０８祭典ｉｎ東京プレ企画〟と位置づけ「荒木栄をうたう」企画を柱に〝うたごえフェスティバル〟を成功させた。京都は地域祭典として１３地域・１分野で合唱発表交流と地域・分野独自の企画を統一して成功させている。広島は、〝０５年日本のうたごえ祭典ｉｎひろしま〟後全県に広がったつながりを結び成功させている。北海道・道南、山形、長野、東京・新宿も合唱発表交流会と合わせてうたごえ祭典を開催している。東京・足立は地域の文化イベントとして定着している。

〔産業別祭典〕

全国教育のうたごえ祭典（大阪）は、「思い切って枠を広げ」「教育と子どもを守るたたかいを励まし」「高校生や小さな子どもたちがうんと輝き」「不当な攻撃をはねかえすエネルギーに満ちた祭典」（感想より）として大きく成功した。

医療のうたごえ全国祭典は宮城のうたごえフェスティバルとジョイント開催で、医療関連団体、東北ブロックの連帯で３つの音楽会がすべて満員の盛況。宮城のうたごえは「おばあちゃんから孫たちへ」の医療版を創作演奏するなど、産業別祭典と県祭典共同開催の大きな成果を残した。

電通のうたごえ全国祭典ｉｎ金沢は、２人の全国電通労働者合唱団ザ・ナッツの団員と通信労組の決意、北陸のうたごえの連帯で成功した。中心になったＮＴＴ労働者の２人が祭典後、金沢紫金草合唱団に入団している。

全国自治体のうたごえ祭典は４０周年を記念して神戸で開催。池辺晋

一郎氏をゲストに迎えるなど多彩な企画で、兵庫のうたごえ協議会、教職員などとともに成功させた。神戸市役所センター合唱団は各区の区役所うたう会を組織し、神戸市職員の新たな合唱サークルが生まれ継続した活動が始まっている。

国鉄の闘いや、福知山線事故の思いをオリジナル曲でまとめた合唱構成を柱にした国鉄（大阪）、郵政民営化後の職場の実態、労働者の半数を占める非正規労働者の問題を取り上げ「暮らしを支える郵便局をまもれ」と訴えた郵便（愛知）、新たな創作曲も含め市民とともに創り上げていく安心安全な私鉄を歌い上げた私鉄（愛知）はいずれも開催地の協議会との連帯で祭典を成功させた。港湾のうたごえ祭典は四国港湾労働組合協議会の協力の下、徳島で開催された。

保育のうたごえは大阪で保育のうたごえ交流会を開催。全国から15団体が合唱交流に参加した。

方針〈4〉歌の広がりをうたごえ新聞読者につなぎ、豊かな〝うたごえ発ジャーナル〟を確立する。

〔うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」〕

うたごえ新聞

08年度編集方針「世界の羅針盤　憲法9条をまもり、いかす。いのちと暮らし　憲法の心を輝かすうたごえ発文化発信」で進めた。

憲法九条関連では、昨年に続き、〝SINGING PEACE 999〟の実践紹介、9条世界会議、識者の提言を特集した。これとあいまって08年度編集は、新年号から憲法九条と両輪二五条をいかす社会へ、の視点が軸となった。日本の明日を警告する貧困社会アメリカの実態を語った新年号インタビューに登場の堤未果さん。著書から詩「私たちが進みつづける理由」を60周年祭典記念曲（祭典総監督、作曲家池辺晋一郎氏作曲）として提供できた。

つづいて、「貧困の岩盤が見えてきた今、働く者一人ひとりを結ぶ新たなつながり」を説く公共一般労働組合副委員長小林雅之さん、「九条の危機を招く貧困の放置」NPO自立生活サポートセンターもやい事務局長湯浅誠さん、「生きづらさ、格差社会からの脱出」作家雨宮処凛さんら。全国の実践紹介と合わせて、集い、声を上げる、うたごえ・文化の役割を発信した。

この意図を実らせる音楽づくりでは、合唱連盟理事長浅井敬壹氏、60周記念祭典を通して池辺氏、指揮者辻志朗氏ら。運動への期待を、矢野ゆたか狛江市長、作家の早乙女勝元氏、ちひろ美術館・東京副館長松本由理子さんらの登場。

連載企画では歌づくりを深めた「作詞アドバイス」（石黒真知子・詩人）、うたごえ喫茶めぐり「うたキタス」（斉藤一正）は、うたごえ喫茶通信、読者拡大の大きな力となった。

通信・紙面作りでは、大阪の山本則幸さんの関西合唱団委嘱作品「レモン哀歌」から作曲家西村朗氏への音楽作りに迫るインタビュー、京都の竹内正彦さんからは〝あくまで平和な合唱団〟の組曲「悪魔の飽食」府内縦断コンサートと同団9条の会発足などの大型通信。県九条の会とタイアップした県のうたごえの活動を伝えた千葉の塙治子さん、活発な通信活動で日常活動を伝えた鹿児島の村永チトセさん、東京の箱崎作次さんなどの活動があった。

「読み、作り（通信・企画提案）、広げる（読者拡大）」活動を促進する〝うた新フォーラム〟・うた新まつりは08年、北海道、長野（長野、飯田）、東京（全都、三多摩、三多摩南部、北部）、神奈川、愛知、和歌山、大阪（大阪、北部）、石川、京都、広島、兵庫、福岡（福岡、北九州）で開かれた。

広く参加者を募り、一人ひとりの「新聞を通しての出会い」が語られた福岡、うたごえサークル・合唱団以外の読者を招き、その一人ひとりから〝新聞・うたごえ〟を聞く企画を組んだ広島などは、あらためて全

員で新聞の存在・位置を深め合う場となった。京都は０９年日本のうたごえ祭典成功への一歩として関西と共同で開催。ここに参加した「合唱団活動休止状態」という滋賀の参加者は、〝うたごえ喫茶の参加者に広げる〟を実践、その後着実に読者を増やしている。

東京では、０８年祭典成功に向け設けられたうた新読者拡大推進委員会の名称を〝プロジェクトＹ〟とし、読者拡大、紙面提案、送稿にとりくみ、祭典成功の大きな牽引力となった。

各地の教訓をいかしてさらに全国開催していく必要がある。

季刊「日本のうたごえ」

うたごえ新聞で捉えた運動内外の今起きている問題、運動を進める上での教訓を深く学ぶことを視点に編集。０８年は№１３９～１４２を発行した。

運動６０周年を節にこれからの運動を語る座談会、堤未果さんの記念講演要旨含む全国総会特集、寄稿「核兵器のない世界へ―２０１０年に向かって」（原水爆禁止日本協議会・土田弥生）、論文「音楽出版とうたごえ運動」（道田隆司）、創作講座「うたった以上そのように生きろ。できないことはうたうな。」（フォーク・シンガー笠木透）等を特集した。また、６０周年記念企画として「私とうたごえ」連載を開始した。

各号に運動づくりのヒントが語られ、特に総会特集号は全国の活動から学ぶところは大きい。が、普及は弱い。誌面充実と合わせて読み深め、普及を強化する必要がある。

方針〈5〉うたごえ出版物をより多くの人にひろめ、様々な出会い・ドラマ・感動の輪を広げる。

〔事業・出版活動〕

９条世界会議での「ねがい」や、ナターシャ・グジーさんの演奏の感動は事業物普及の大きな力になった。また〝ＶＩＣＴＯＲ　ＪＡＲＡ・もうひとつの９・１１〟のイベントでも９００人が参加した中２００人以上の方に、ＣＤブック「平和に生きる権利」が普及された。

奈良蟻の会合唱団では、「歌いにきているのに何で販売などしなければいけないのか」との声にていねいに話しあい、事業部を確立し、あらゆる演奏の機会に出版物をもちだし幅広く事業活動にとりくんでいる。

合唱団サボテンをはじめ、名古屋青年合唱団、愛知のうたごえが協力し、音楽センター出版物とＣＤ「わしらの歌」が発売され県内６５０枚をはじめ、全国に紹介し普及された。

南部合唱団（東京）は、メーデー歌集普及を百数十団体に歌で呼びかけ、近年最高の２９００冊以上を達成した。東京では０８年祭典ｉｎ東京成功めざし事業委員会を確立し、祭典グッズのお酒、飴などとあわせ、「０８祭典歌集」「ＣＤ１０枚組」の普及に取り組み大きな成果を生んだ。景気の悪化など事業売り上げは厳しいなか、事業の位置づけを明らかにし、普及体制の確立で運動を切り開いている教訓を大切にしたい。

「事業普及だより」は２１号まで発行した。自主出版物の全国的紹介、事業活動の経験交流など、ニュースの充実や事業フォーラムの開催などが必要になっている。音楽著作権は引き続き大切にしていきたい。

方針〈6〉演奏・創造を発展させ、また、運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育をすすめ、21世紀の運動をになうリーダーづくりを計画的にすすめる。

〔演奏・創造活動〕

東日本合唱講習会（東京。１２８人）は、０８年祭典ｉｎ東京開催地

として合同企画曲に対する集中した合唱講座となった。特に「私たちが進みつづける理由」は意欲的に取り組まれ、作品の内容と祭典に対する確信が深められた。合唱特別講師に岩本達明氏を迎え、前述曲の積極的な指導に併せて指揮チャレンジ講座も行い、巧みなリードで好評であった。また、運動内講師の声楽・合唱指導も連帯と蓄積を感じさせた。

西日本合唱講習会（奈良。１６０人）は、合唱特別講師に岩本達明氏を迎えて祭典全国合同曲を中心にその音楽的内容を深め充実したものとなった。音楽を歌い手のものにしようという働きかけ、表現の実感、など歌い手を励まし魅力的。声楽講師は内海緑氏を迎え、声づくりについて論理的で実践的な講座となった。運動論講座も好評、先輩の経験や理論から学ぶ大切さを感じさせた。合唱講習会は日常とは違う大合唱の魅力と交流と共に、専門家講師から何を学ぶか、うたごえ運動の創造課題、地方講習会の共通課題、などを今後更に深めることが重要である。

第２３回全国指揮・合唱指導者講習会（松本。１１０人）は初参加者も多く、若手も目立ち、全体に活気のある講習会となった。特別講師としては合唱に栗山文昭氏、指揮法に関谷弘志氏を迎え、共に示唆に富む内容で学ぶものは大きい。コース別指揮講座も受講希望者が多く、学ぶ意識の高揚もあり連帯感も生まれている。また、合唱隊参加者も多く合唱講座では合唱力の前進も見られて、要求の高まりと充実感を感じさせた。課題としては、事前の準備をさらに高めること、継続的な参加者の前進と一層の成長、声楽指導の系統的な研究、などが求められる。また、新しい指導者・リーダーの育成を視野においた合唱団としての積極的な送り出しも必要である。

地方講習会・交流会は北海道、九州、東北などで継続的に行われている。それぞれ地元の合唱団、また新しい指導者との結びつきを強め、地方祭典等の成功にも大きく貢献している。その他、京都、新潟、長野、静岡、埼玉などでも行われ、また大阪指揮研究会、東京指揮考座、団内指揮研究会なども行われている。

教育活動を更に高める上で他団体・各種講習会の内容を知ることも重要である。こうした情報交換、指揮者・指導者の問題意識の交流・向上など、指揮者・指導者ネットワークの結成も継続的な課題として追求が必要である。

０８日本のうたごえ合唱団は２０５人が登録、南京公演（１０２人）、０８年祭典ｉｎ東京・記念音楽会の演奏を成功させた。

方針〈7〉青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめ、21世紀を担う青年をたくさん迎える。

〔青年のうたごえ〕

非正規労働者、とりわけ若い世代の労働・雇用情勢は深刻さを増している中、「世の中おかしい！」「変えていこう！」と、盛んなアクションが展開され、青年のうたごえも積極的に活動をした。１０・５全国青年大集会（明治公園）では、開会前の演奏を〝働くこと〟をテーマに青年自身が関わった創作曲で取り組んだことは特徴的である。

〝核兵器なくそう世界青年のつどい〟と結んで、ビキニデーや国民平和大行進、青年のつどいｉｎ広島・長崎などに、創意的に取り組んだ。

〝全国青年のうたごえ交流会ｉｎぎふ〟では、開催地の多治見親子うたう会、多治見青年合唱団の青年を中心に、隣県である東海・長野の青年のうたごえと準備を進め、全国あわせて５０人が参加、０８年祭典ｉｎ東京参加への思いを高めあった。

０８年祭典ｉｎ東京では、「その手の中に」「ありがとう」などに全国合わせて約１３０人が舞台に登った。開催地東京の青年のうたごえ実行委員会発足が遅れ、東京の歌い手を組織し切れなかったことは課題となる。

一方で、例年の祭典では〝青年のうたごえのステージ〟として独立していたものが、「人間の歌」のステージなど、青年以外の分野と共に準備を進めたことや、「世界がひとつになるまで」のダンス、「ゴスペルソン

グ」など青年の参加を意識した企画も多く、祭典全体を通して青年たちの姿が多く見られたのも特徴的だった。

東京・関東で開かれる〝江戸やっこまつり〟では、初めて若者合同のステージが取り組まれ、08年祭典in東京・お江戸のにぎわいコンサートでも、若手がサークル指導に駆け回り大事な役割を果たすなど、〝郷土のうたと踊り〟の分野でも若者の活躍が光った。

介護労や公共一般など労働組合がうたごえ運動と若手育成を結びつけて08年祭典in東京を位置づけ、積極的に青年組合員を組合で援助をして派遣したことは、意義深い。めまぐるしい社会の動きの中で機敏に〝行動する〟事と〝学ぶ〟事がますます大切になる中で、それらの機会と環境を設ける工夫と努力が求められる。

方針〈8〉サークル・合唱団をつくり、大きくし、うたごえ協議会の強化と建設をすすめる。また、ブロックの連帯活動を活発にするため、ブロック連絡会づくりを強める。

〔組織建設〕

祭典や演奏会を契機に結成される公募の「記念合唱団」などから、あらたな会員を増やしている例、研究生、合唱講座などから団員増につなげている例。日常の演奏普及活動が会員拡大につながる例が全国各地で見られる。

地域祭典・産業別祭典や日本のうたごえ祭典運動の中で、東京の公共一般労働組合で大塚うたごえ酒場を基盤に〝コールラパス〟が、自治体祭典のとりくみで神戸市職員コーラス〝ゆいまーる〟が誕生するなど、新たなサークル・合唱団が生まれ活動を継続している。東京、埼玉では年金者組合を中心に08年祭典in東京の取り組みの中で急速に高齢者のうたうサークルづくりが進んでいる。女性のうたうサークルも各地で生まれている。愛知では医療生協のなかでのサークルづくりが広がっている。奈良は07年祭典in奈良後新たなサークルが生まれ全体が活気づいている。これらの新しいサークル・合唱団が継続して活動して行くために音楽・運動リーダーを育て、新しい団体を支え合う協議会が必要である。

運営体制を確立し、定期的な会議の開催、ニュースの発行などで前進している都道府県協議会が増えている。一方で、未加盟県の克服、協議会建設を計画的に進めていく点では課題も残している。

祭典を毎年開催している北海道、九州、ブロック交流会を毎年開催している東北、関東・東京、〝うた新まつり〟など共同した取り組みを重ねている関西、産業別祭典をブロックの連帯で取り組んだ北陸などでブロック活動が前進した。

〈うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」読者拡大〉

60周年の年に過去最高読者を目指し、全国会議の開催、本部専従の配置など特別な体制もとり4期に渡って読者拡大「わっしょいキャンペーン」をおこなった。一年間を通して読者拡大を運動の柱に据えたこの取り組みは、東京をはじめ全国でたくさんの新しい読者が生まれ、福岡は60周年目標を達成した。全体として目標の過去最高読者には届かなかったものの、昨年の総会時から大きな前進をすることができた。

季刊「日本のうたごえ」読者はここ数年横ばい状況で、会員数の半数に満たない読者にとどまっている。運動の質を高め、音楽の内容を深め、新しい運動の担い手を育てていくためにも機関誌の会員の全員購読と活用はますます大切になっている。

方針〈9〉〝郷土のうたと踊り〟を活発にし、専門家との協力協同、全国講習会の充実、和太鼓と民舞のまつりの全国展開プラン、まちおこし、まちづくりにつながる活動を計画を持ってすすめる。

〔郷土のうたと踊り〕

０８年における郷土活動の最大の取り組み成果は、６０周年の記念となる年に、郷土独自の祭典、お江戸のにぎわいコンサートを開催し、１４００人の観客、５００人の出演者で大成功させたことである。大音楽会でも「木遣りにぎわい太鼓」「ロックソーラン」ともにオープニングにふさわしく、祭典を大いに盛り上げた。これらの取り組みの中で若者たちが活動を大きく支え、合同の舞台をつくる中で、連帯を強めて行ったことも、今後の活動の大きな力になるものと確信できる。

５０周年から６０周年に至る関東を中心とした東日本での郷土活動の成果がこのコンサートの内容と組織の中に表れたものだといえる。

東日本では４月の郷土講習会（６９人）と６月の〝江戸やっこまつり〟を柱に、活動をすすめてきている。祭典の運動づくりの柱として「木遣りにぎわい太鼓」の創作を先行させ広げていったこと、講習会で広げ、江戸やっこまつりで合同の舞台をつくり、その後、東京・多摩地域、川崎、横浜、北関東地域実行委員会（栃木、茨城）をつくり、練習会を広げる形で組織活動を強め、ネットワークをさらに広げ、連帯を強めてきたことが成功の大きな力になっている。

西日本でも郷土講習会が４年ぶりに開催され８８人が参加した。講習会には祭典実行委員会から講師を派遣し「木遣りにぎわい太鼓」を学び広め、田楽座による「天平太鼓」を祭典では関西合同として発表することができた。

ただ、東西の講習会ともに、これまで参加していた太鼓チームの成長・発展に伴い、参加者が従来より減少してきており、その内容、講師、呼びかけ対象の拡大など課題も残している。

方針〈１０〉世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪を広げる。

〔国際交流〕

１９９８年以来つづけてきた日韓音楽交流の中から、０８年祭典ｉｎ東京に仁川・平和の風合唱団１３人が参加、合唱発表会交流の部と大音楽会に出演し大きな感動を与えた。５月の光州・仁川の旅には、８都県２０人が参加、光州芸術祭での演奏、交流、仁川市民文化芸術センターとのコンサートと交流を行った。

日本のうたごえ合唱団が、全国紫金草ネットワークを中心に積み上げてきた日中文化交流を発展させ、南京コンサートを成功させた。

日本ＡＡＬＡ主催のエクアドル・ボリビアの旅に小沢事務局長ほかが参加、国民が主人公になる国づくりの息吹を感じ取るとともに、フェルナンド・ヒメネスさんの０８年祭典ｉｎ東京へのゲスト出演にもつなげた。

２００８年日本のうたごえ祭典in東京

総括

２００８年日本のうたごえ祭典in東京実行委員会

●はじめに

「６０周年記念　２００８年日本のうたごえ祭典ｉｎ東京」（以下、０８年祭典ｉｎ東京）は、３つの音楽会―「お江戸のにぎわいコンサート」「６０周年記念音楽会」「大音楽会　希求～ねがい～」と合唱発表会等の企画を含め１８０００人が参加し、成功をおさめることができた。

祭典開催にあたって実行委員会では、「私たちは次のようなうたごえ祭典をめざします」という5項目のコンセプトを持った。

＊今こそ、平和憲法をまもり輝かせる祭典。
＊都民の誰もが人間らしく生き働くことのできる「東京」をつくるエネルギーを結集し、東京を平和・文化の発信地にしていく祭典。
＊人と人とをつなぎ、心のふれあいと共感を歌で生み出す祭典。
＊都民・国民の願いを歌い上げるとともに、伝統や芸能、諸外国の自由・平和・平等を願う音楽で豊かに交流する祭典。
＊うたごえ運動６０周年の蓄積を示し、未来に向けて「うたごえは平和の力」の心を世界に伝える祭典。

３つの祭典企画はいずれも好評を得、このコンセプトが実現できた祭典として、ご協力頂いたみなさんに感謝し、ともに成功を喜びたい。

今回の祭典では、著名人、命と暮らし・平和を守るさまざまな運動の代表者など５６人の方に「賛同呼びかけ人」になっていただき、広範な方たちに支えられた運動をアピールすることができた。また池辺晋一郎氏に、祭典総監督をお引き受け頂いたことが大きな音楽的支えとなった。企画立案時から相談に乗って頂いたのみならず、お忙しい時間を割いて新曲「私たちが進みつづける理由」（キム・ロザリオ詩／堤未果訳詩）を書き下ろして下さり、祭典当日の指揮、「６０周年記念音楽会」の進行役まで、たいへんなお力を貸していただいた。「私たちが進みつづける理由」は祭典全体の企画をささえる柱となり、さまざまなプログラム、曲がすべて「…だから私たちは進みつづける、歌いつづける」と収斂し、「憲法を輝かせる」思いを貫く企画の実現に結びついた。祭典後、池辺氏からは「僕が言い続けてきた『外へ』と『音楽で』、その方向が確かめられるような祭典になったと思う（うたごえ新聞０８年１２／１５号）」という評価をいただいた。あらためて氏にお礼を申し上げたい。

祭典開催については、１０年前の５０周年記念祭典では様々な財産を残したものの、赤字という負の財産も生んだ経緯があり、この反省をどう生かしてとりくむかが問われた。「東京で開催するなら東京のうたごえの一つひとつのサークル・合唱団、一人ひとりが主人公となり、自分のこととしてとりくむ祭典にしよう」「論議を尽くし、決めたことには団結しきろう」と約２年をかけてサークル代表者会議や協議会の臨時総会を通じて討議した。当初は「やるなら赤字の出ない規模で、背伸びをせずできることを」という慎重論が多かったが、「祭典をやってもやらなくても、６０周年という節目はやって来る。ならば積極的にチャンスに変えていこう」「新しい仲間、若い世代と結びつくにはやはり祭典開催が必要」「うたごえの仲間内だけでない、圧倒的多数の都民が参加する祭典にしよう」と次第に意気があがり、２００５年１２月、臨時総会をもって東京開催を決議した。

祭典の内容については、企画懇談会、祭典大みんな語る会で大いに語り合って夢をふくらませていった。この話の中から実現できた企画もできなかったものもあるが、この夢が企画立案を支え、祭典本番までの原動力となっていった。

祭典準備中の情勢としては、憲法「改正」のための国民投票法案が可決され、日本国憲法の主骨である戦争放棄を謳った９条第２項の形骸化を狙い、ふたたび戦争への道を準備するきなくさい動きが進み、次いで安倍内閣のもとでは教育基本法が「改悪」された。一方、２００４年に９人の代表により「九条の会」が提案され、全国の地域で、職場で、学園で数千にのぼる「九条の会」が結成され、その活動が活発になるにつれ「憲法九条を変えずに守りたい」という世論が大きくなってきた。このような状況の中で、「多くの国民と結んで憲法を輝かせる平和のうたごえを」と一貫してとりくんできたうたごえの方針を全面的に掲げ、また暮らしや福祉、労働条件でも大きな「痛み」を受けてきたこの間の状況を「首都東京から変えていきたい」との決意をこめて祭典運動にとりくんだ。

祭典の組織的規模についても論議を重ね、「大勢の参加者が一堂に会し、一緒に歌う場を作ってこそうたごえ祭典」と１万人規模での大音楽会開

催を決めた。多数の力の重要さを実感させ１万人の祭典に向う背中を押してくれたのは２００７年６月、教科書検定内容に反対の意を示した沖縄県民集会である。現地に飛んだ祭典運営委員が持参の「沖縄タイムズ」「琉球新報」の約１０万人の写真を見て「やればできる」「圧倒的多数の力が国を動かす」「有明コロシアムはたった１万人しか入らないけれど（笑）満杯にして世にアピールしよう！」と奮起した。

この間にとりくまれた福井、奈良での祭典成功も、東京への励ましとなった。祭典後のことであるが、この年末年始の「年越し派遣村」でも「村民」のみなさんと実行委員会、数百人のボランティアの方たちの結集で国が動いたことは記憶に新しい。私たちがとりくむ「日本のうたごえ祭典」も、音楽を通じて多くの人の願いを結び合い発信する場として大きな存在であることを、あらためて実感させられた。

今回の祭典で開催地東京に残った最大の財産は、文字通り「東京がひとつ」になってとりくめたこと、そして成功という結果を出せたことである。また一人ひとりの思いや要求を大切に、自ら発信できる祭典に、とめざしてきたことも、「東京らしい」「うたごえ６０周年のあゆみがわかる」企画の実現に結びついた。準備不足も多々あったが、会場が１年前には決定できなかった等の困難を乗り越えてここまでの祭典ができたことを素直に評価したい。以下、それぞれのとりくみについての総括にふれていく。

●企画総括

祭典の音楽会の構成は「大勢の参加者が一堂に集い、歌いかわす大規模な音楽会」と「うたごえの音楽の到達点を示すとともに良い音楽を堪能できるコンサートホールでの音楽会」という基本的な構想をもって進められた。「大規模な音楽会はそこそこの人数でない、圧倒的な規模で開催してこそ今東京で開催する祭典の意義がある」の決意を貫き大会場での開催実現をめざした。その結果、有明コロシアム（約１万人規模）での「大音楽会　希求～ねがい～」と日比谷公会堂（約２０００人）での「６０周年記念音楽会」、パルテノン多摩（約１４００人）での「お江戸のにぎわいコンサート」という３つの音楽会で祭典を構成することになった。

企画立案にあたっては「憲法を守る心」を一貫したテーマに据えた。様々な身近な場面から人間らしさを豊かに歌っていくことで、憲法のすばらしさを鮮明にするという意図でのぞんだ。６０周年の節目を示す上では、これまでの運動に確信を持つことと、明日からの運動を豊かにしてゆく目的で、うたごえの６０年を音楽を通じて振り返ることに取り組んだ。

また、アジアや中南米などとの音楽の交流を通じて、世界から日本を改めて見、楽しく世界を身近にするプログラムを追求した。大音楽会ではこれまでのような地域・分野別合同とは少し違った演奏、歌い手の組織をめざし、一つひとつの主張を明確にするために、個別のテーマに沿ったストーリー、エピソードを構築し、相互に関連し合う内容をめざした。

＊企画を作り上げていく上で

企画のスタート時は、「５０００人の歌い手組織」を視野に、「労働者の権利とたたかい」「子ども・親・教育・保育と地域」「環境・自然」「平和・九条」「シニア」「青年」「女性」「郷土のうたと踊り」「国際交流」「大合唱」「６０周年企画」の、１２本の柱を立てた。イメージを膨らませる「祭典大みんな語る会」でも、実現こそしなかったものの「本物の象やサーカスを登場させたい」「花火を打ち上げたい」など、自由で奇抜なアイデアが多く出され、「やりたいことを精一杯詰め込み、実現する祭典にしよう！」という気運が高まった。

その後、大音楽会については、論議の中で「働くということ」「生きるということ」「命ということ」という３つのテーマに絞られ、さらに論議を重ねる中で「戦後からの６３年間の東京と、６０年のうたごえの歴史」「６０年目から歩み始めるうたごえと、今の東京・日本・世界」という

方向で企画が組まれていった。

「郷土のうたと踊り」の部分については、５０周年祭典をきっかけに、毎年東京上野水上音楽堂で開催されている「江戸やっこまつり」の集大成をと、大音楽会の中の郷土企画とは別に、「お江戸のにぎわいコンサート」が独立して取り組まれた。

うたごえ６０年を音楽を通じて振り返るという点では、「６０周年記念音楽会」において、日本のうたごえ全国協議会が６０周年企画として提案推進してきた〈うたごえと日本の作曲家たち〉コンサートの反映や、うたごえ運動の中で役割を担ってきたアコーディオンによるオーケストラなども組み入れた企画準備が進められた。

もう一つ企画委員会として重視したのは「東京らしさ」である。１０年前の５０周年祭典の企画では「記念行事として『取り組むべきもの』が先行しがちになり、『地元・東京から』という自分達の視点の企画として受け止め切れなかった」といった意見が出され、「東京」を発信することと、「自分達の音楽会」として取り組むことに重点を置いて企画の議論が進められた。

見る・聴くばかりの祭典ではなく「全員が主人公」になれる、会場みんなが歌い交わし、参加する場面も重視した。特に０７年祭典ｉｎ奈良の「大うたがき」のような場面をという声は祭典準備段階からあり、「大江戸どんちゃか」の名称で独立企画とした。さらに、みんなで歌う要素を「６０年の歴史」を込めた「うたごえの誕生」や会場中で即興合唱をする「パートナーソング」へと発展させ、ともに大音楽会の中で「みんなが歌い交わす、これこそうたごえだ」「参加した！　という充実感を得られた」と、好評の企画となった。

３つの音楽会全てで「国際交流」が旺盛にとりくまれたことも特筆する事項である。お江戸のにぎわいコンサートではアフリカよりＪＡＭＢＯ、６０周年記念音楽会ではロシアより国立モスクワ音楽院室内合唱団、大音楽会では中南米・ボリビアよりフェルナンド・ヒメネス＆グループ・カンタティと、韓国より仁川平和の風合唱団、アメリカのジャズシンガー、ディナ・ハンチャードが登場するなど、国も多岐に渡っていた。今祭典のコンセプトを生かせたと同時に、今後のうたごえ運動に反映するであろう国際的結びつきを深めることができた。

分野や階層が一つのテーマに沿って交じり合うことを目指した企画としては、「人間の歌プロジェクト」では、職場のうたごえを中心に青年のうたごえ、東京土建バンド、共同作業所などが「働く仲間」という点で、「青い空はプロジェクト」では、女性のうたごえ、高齢者のうたごえ、保育のうたごえ、東京大気汚染裁判を歌って闘い勝利した足立のうたごえなどが「生命を守る」という点で、それぞれの合同だけではなく流れを意識したステージ作りに取り組めた。今後様々な運動の方々と結んだうたごえの企画や共同活動の展望が開けるプログラムになったと言えよう。

祭典全体を通して、若い世代の参加や、うたごえの歴史・財産を次世代に継承することを意識した企画に積極的に組んだ。大音楽会では、運動の歴史を学びながらステージ作りをする有志を募った「うたごえの誕生」や、今うたごえに結集している青年たちより更に外への広がりを求めた「ゴスペル」、「世界がひとつになるまで」の、レベルの高いダンスアレンジ。そして首都圏青年ユニオンなど、働く権利と喜びを求めて立ち上がる若者たちへ呼びかけた「ありがとう」。お江戸のにぎわいコンサートでは「若者合同」が取り組まれたほか、創作太鼓・演出・指導など積極的に若手にゆだねる部分も多かった。「今年の祭典は青年の姿が随所に見られた」という感想が少なからず届いているのは、こうした意識的な企画立案が生きたと言える。

「憲法」を歌い上げるという観点は、それぞれの企画の中にも当然盛り込まれていたが、祭典総監督を務めていただいた池辺晋一郎氏による「私たちが進みつづける理由」がその牽引的作品となった。交響曲「五月の歌」と並んで、太く大きな背骨として祭典全体を支え、観客にも歌い手にも、まさしく「私たちが進みつづける理由」を明瞭に示してくれた。

＊ステージを具体化していく中で

東京としては、かつてなく慎重に各地域・分野の意見をくみ上げながらの企画作りになった。企画の確定に時間がかかり、全国への発進が遅れてしまったことは、歌い手の組織や練習会の設定、ひいては全体の組織にも影響を与えることとなった。

その中で、それぞれの企画プロジェクトは練習会を積み重ね、大合唱の実現に向けて奔走した。準備に取り組んだ事務局のみなさんの奮闘もさることながら、専門家の協力によるところも大きかった。東京大空襲プロジェクトでは、指揮者の安藤由布樹氏自らも、自身の指導するサークルに歌っての参加を呼びかけ、３００人の歌い手組織目標を達成した。女性合同では、指揮者の辻志朗氏が、女性のうたごえ実行委員会主催の３回の合同練習のほか、東京・関東各地を指導して回って下さったことが、１０００人を超える大合唱を創り上げる大きな原動力となった。大音楽会での演奏は圧巻で「１０００人という数の力を見せ付けられた」「大会場でも質の高い音楽を創ることは可能だと確信がもてた」など、絶賛の声が寄せられている。高齢者のうたごえでは、全国年金者組合の協力があり各地で練習会が開かれ、うたごえサークルがない地域からも多くの歌い手参加を得た。

記念音楽会では交響曲「五月の歌」に取り組む中で、合同練習とは別に、各ブロックの中心的合唱団が呼びかけてブロック練習会を実現し、創造的連帯という点で貴重な経験を残し「東京がひとつ」の祭典運動につながった。

一方で歌い手組織に苦労した面もあった。「ぞうれっしゃ」は、１０年前と違い子どもたちが祭典に参加しにくい状況や、合唱発表会と大音楽会が離れた日程だったこと等が影響した。「ゴスペル」、「世界がひとつになるまで」ダンス等は、企画決定からの準備期間が充分とれなかったことで広がりを作りきれなった。「パートナーソング」は人数は目標を超えたが、当初目指していた、うたごえ外の青年組織は充分できなかった。「人間のうた」も、歌い手組織が大変であったが、東京土建、共同作業所、首都圏青年ユニオンの協力を得て「まさに人間の歌！」というステージを実現することができた。日常的に「一緒に歌う場」を積み重ねていくことの大切さを教訓としたい。

＊音楽づくり、舞台運営について

音楽づくりについては、東京の創造幹部が運動の中で蓄積した力を発揮し、大きな舞台での演奏を成功させたことと、専門家の方々のご協力を強調したい。

６０周年記念作品と位置づけた交響曲「五月の歌」を外山雄三氏の指揮で上演できたことは、祭典全体を押し出し、記念音楽会の魅力を高める上でも大きな力となった。合唱指導の栗田博文氏からは、作品の理解を深める上でも、外山氏とのコンセンサスを作る上でも多大なご尽力をいただいた。記念音楽会では、ゲスト出演いただいた久武麻子さんのチェロで「荒木栄の思い出」を演奏、うたごえ運動に大きな即席を残した荒木栄・井上頼豊両氏の業績を偲ぶ場面ともなった。また男声合唱に岩本達明氏が新しい風を吹き込んでくれ、清新で力強い演奏となった。

「私たちが進みつづける理由」は池辺晋一郎氏による熱のこもった練習会が何回も持たれ、出演者の演奏への意欲を高めた。東京での練習会の様子が全国にも発信され、祭典の柱となったこの作品の熱い大合唱に結びついた。辻志朗氏からご提案のエレクトーン・オーケストラは、大音楽会女性合同のほか、高齢者合同やフィナーレの「ねがい」などで演奏され、音楽の豊かさをいっそう増し、特に「ねがい」は９条世界会議で演奏したオーケストラアレンジを見事に再現し、スケールの大きな演奏の力となった。「ゴスペル」ではゲストの亀渕友香さんとＶＯＪＡのみなさんの熱唱で感動的な舞台をつくりあげることができた。

舞台運営については、大音楽会では大会場での舞台転換による演奏時間の遅延が心配された。舞台スタッフの尽力で終演時間の遅れは最小限に止まったが、リハーサルの進行や出演誘導、舞台転換の遅れ等について、人員配置の配慮や各企画との徹底、リハーサルで本番に向けての確認事項の整理などが不十分であった反省が残る。お江戸のにぎわいコン

サートでは、時間的には長めの音楽会でありながら、それを感じさせなかったのは、企画・演出ともに関わっていただいた三浦恒夫氏の力が大きい。６０周年記念音楽会では、プログラムの変更や、開演時間の前倒しなどが生じ、演目の順序変更や全国への周知に苦心した。大勢の出演者待機が困難なホールの使い勝手には苦労したが、舞台出入りや転換はスムーズに運び、終演時間が延びることは無かった。

全体としては、企画意図については、３つの音楽会でほぼ実現できたと言える。が、どの企画に関しても、それぞれの担当者の「最大限理想的な時間を確保して演奏をしたい」という想いと、音楽会全体の時間は「長時間にならないほうが良い」という総意との板ばさみ状態があり、演奏時間の配分は相当な難産であった。みんなの「やりたい」をたくさん詰め込みたいという反面、時間の制限や会場など様々な条件もある。どうすれば、みんなのやりたい音楽会になるのか、東京のとりくみの中で課題にしていくと同時に、今後開催される祭典で打開できることを望むものである。

●組織総括

組織目標を達成し祭典を成功させるために、次のめあてをもってとりくんだ。

①平和を願う多くの人々、人間らしく生き働くことを願う多くの人々と連帯する。

②東京のうたごえの総力を結集する

・祭典をとりくむ自覚を大切に、一人ひとりの希望・要求を大切に

・１０００人実行委員会に登録してもらい、一人ひとりが具体的にとりくむ内容を明らかにして草の根からの組織活動を

③全都１０カ所にブロック・地域実行委員会を確立し、これを基盤にする

①については、祭典企画とむすび、高齢者（年金者組合）、大気汚染訴訟のたたかい、東京大空襲訴訟、新日本婦人の会、首都圏青年ユニオン、公共一般、介護福祉労、東京土建などの団体に一緒にとりくんでもらうことができた。特に高齢者、女性は独自の分野実行委員会を確立し、歌い手組織、練習会の開催と旺盛なとりくみとなった。高齢者実行委員会は年金者組合が祭典参加の方針を持ってくれ、「後期高齢者医療制度は撤廃させよう」と厚生労働省前のすわりこみで歌ったり、高齢者大会に大挙して参加しての演奏と祭典の宣伝などをくりひろげ、東京・全国とも大きく祭典参加の輪を広げた。女性は「成功させる会」として実行委員会を立ち上げ３３のサークルが参加し、新日本婦人の会が祭典を方針にかかげてくれた動きと併せて歌い手組織に奮闘した。この努力とともに、「今この歌を歌いたい」という要求と一致した選曲、音楽を豊かに引き出し素晴しい合唱を作り上げた指揮者辻志朗氏の力で１０００人を越える歌い手組織を達成した。介護福祉労、東京土建も祭典出演を活動方針に位置づけてくれ、企画を支える力になっていただいた。

実行委員一人ひとりの組織のとりくみも、今まで自分たちの音楽会に誘っていた友人の範囲を大きく超えることが求められ、実行委員の周りに地域で、職場で、新たな人とうたごえとの結びつきが生まれた。

②については、「東京がひとつになってとりくめた」と明言できるとりくみとなった。１０００人実行委員会は、うたごえ祭典の歴史の中でも初のとりくみと言われ、実行委員証（カード）を渡し、自覚を促しながら「自分から発信する」祭典運動に大きな役割を果たした。登録人数は１０４８人にのぼり、祭典直前の組織の追い上げでも、この１０００人実行委員会一人ひとりの努力が底力を見せた。

③のブロック地域実行委員会は、１０カ所すべてで確立し、サークル・合唱団が中心になってそれぞれの地域の運動団体や個人と協力して組織活動をすすめた。それぞれの地域の運動の実態を考慮しつつブロック地区別の組織目標を確認し、達成にむけて奮闘した。

今回の祭典の組織目標は次のように設定した。
＊祭典賛同金…東京６５００口、全国３５００口
＊大音楽会組織…東京８０００人、全国４０００人
＊記念音楽会組織…東京６００、全国１４９１人
＊お江戸のにぎわい…１４００人

祭典賛同金は、６０周年ということで全国各県にも従来以上の指標を持ってとりくんでいただき、超過達成した。開催地東京の目標も大きかったが、１０ブロック地域の実行委員会の地道な努力で７１６８口と目標を大きく上回る結果となった。音楽会組織は、「お江戸のにぎわい」「６０周年記念音楽会」ともに満席、「大音楽会」も東京８０００人の目標には届かなかったが、９０００人の来場であの有明コロシアムが埋まった、という組織的成功をかちとることが出来た。６０周年という運動の節目を積極的に受け止めた各県、特に首都圏の参加運動の力も大きかった。

東京の大音楽会チケット普及の結果は目標の８６％。ブロック目標を達成した北部は１０４％。次いで港区・新宿区が９０％台、東部・西部８０％台の到達であった。特に北部ブロックと港区は、全ブロックの先陣を切り全体のチケット普及に大きく貢献した。目標達成した北部ブロックは、５０周年祭典以降、協議会加盟サークルを増やして地域協議会を確立し、この地域の大部分のサークルが加盟している状況を作ってきた。サークルの音楽会では互いに組織や運営を手伝い、月１回の定例会議を通じて交流やその時々の活動の具体化を続けてきた。この蓄積が、組織目標を確実に受け止めてサークルごとの目標を持ち、一人ひとりの目標を持ち、参加の呼びかけを広げ目標達成するという結果を生み出した。大人数のサークルがない地域で１２００人の組織を達成したこの経験は、協議会を確立し結集する大切さを示している。他の地域のいくつかでも、協議会づくりの展望が見えてきたことは、今祭典の組織活動を通じての大きな前進と言える。

組織のとりくみは「祭典ニュース」「運営かわら版」（運営委員会ニュース）「組織委員会ニュース」でとりくみ状況や到達点、行動提起を発信しながら推進した。西部の組織担当者の「糖尿病で通院しているが『このところ血糖値が上がってますね』と言われ『祭典のチケットが広まらないので血糖値も下がらないんです！　ぜひチケットを買って下さい！』と主治医に迫り、２枚買ってもらった。さらに５枚預かってもらって売ってもらった」というエピソードが共感の笑いとともにその「渾身のがんばり」を伝え周りの奮起につながるなど、みんながともに頑張っている状況を交流して推進力にした。祭典直前はチケット入金集約を日報体制で行い、「組織ニュース」で発信した。

東京８０００人の大音楽会目標が達成できなかった反省点として、当初「５０００人の歌い手組織」とかかげていたが、企画組織の各プロジェクトの取りくみを組織委員会が充分把握できないまま進行、分野・企画ごとの組織目標が確立できず、当初想定していた「企画と地域」の「タテヨコ」双方からの組織力が充分発揮できなかったことがあげられる。さらに、各地域ブロックへのアプローチとして組織担当者が決まらないブロックへの働きかけ、各ブロックの組織目標の受けとめやチケットの配券状況についても、もっと強力に迫るべきであった。

今後に生かすべき課題としては、大多数の都民にうたごえを届け広げる視点を追求し、協力を頂いた労組や諸団体との日常的な「ともに歌う」共同活動や結びつきを強めていくことである。「東京がひとつ」になってとりくめた今祭典の財産を生かし、日常活動に位置づけていきたい。

●うたごえ新聞読者拡大のとりくみ

日常的な拡大推進本部の体制を拡充した「プロジェクトＹ（わ～い）」を確立してとりくんだ。各ブロックから委員が参加し、「うた新まつり」「東京の合唱発表会」等の節目を設けながら、その時々の紙面で何を押し出し、どこに新読者を広げるかという方針を持って読者拡大にとりくんだ。独自の体制を確立したことで、読者拡大の課題を常に祭典運動の

中に位置づけ、組織活動との連関で進める構えができた。また「Ｙ」の委員自身の奮闘も当然あったが、その周りのサークル・合唱団で読者拡大にとりくむ人が格段に増えたことは大きな成果となり、動く人が増えるとともに読者人数も広がった。また独自のニュースを発行し、拡大のとりくみの成果やドラマを伝え次の行動につなげていった。

最終的には東京の目標は達成できなかったが、「祭典までの購読」という人が継続してくれたり、祭典を機に読者になった人の広がりなど、新たな読者層も生まれている。祭典運動の中で得た、「多くの人がとりくめば必ず読者は増える」「うたごえの仲間を広げる真ん中に必ずうたごえ新聞を位置づける」の教訓を、今後の東京のうたごえの日常活動に生かし、目標達成を引き継いでいきたい。

●事業・宣伝・プレ企画・財政について

＊事業のとりくみ

祭典グッズはお酒（護九里）、飴（平九郎飴、表現の自由のど飴）、タオルマフラー（うたおーる）、後半で絵葉書（ねがい歌詞）、しおり（詩季折々）を発売した。「護九里」や「表現の自由のど飴」はそのネーミングで祭典コンセプトの「憲法」を押し出した。「今日も、ゴクリ」の創作曲も普及にはずみをつけた。

音楽センター関係商品では「１０枚組ＣＤ」、祭典出演者組織や練習会を通じて祭典楽譜集の普及を中心に据えた。楽譜集は、「コピーをしないできちんと楽譜を買おう」という気風が進んだが、歌い手全体の人数に照らすとまだまだ普及の余地はあった。「どんちゃか」では歌集「うたうたうた」の要望が多く、歌う喜びのあるところ歌集が求められることを示した成果だった。祭典プログラムなども積極的に普及し、事業活動では目標以上の成果をあげた。有明コロシアムの「物産展」は多くの団体に出店して頂くことができ、祭典参加者の利用も多く好評であった。

＊プレ企画

うたごえ喫茶を主宰している営業店、市民グループの方も参加してもらい、プレ企画委員会の活動を通じて、うたごえ喫茶関係者に祭典の意義を理解し協力してもらうことができた。主なとりくみは、９条世界会議での祭典アピール、映画「荒木栄の歌が聞こえる」の上映会支援など、事業・うた新拡大との連携も視野にいれたものを実行した。

大音楽会での「大江戸どんちゃか」もプレ企画委員会のイニシアチブでとりくんだ。当日は、参加者が開場前の列を作っている中での歓迎うたう会（前どんちゃか）、大音楽会フィナーレ後の大うたう会（大江戸どんちゃか）、終了後のロビーでの送り出し（後どんちゃか）を成功させた。２時間にわたる前どんちゃかは、うたごえ祭典ならではの歓迎ムードを高めた。開場を待つお客さんに楽しんでもらえ、開演前からうたごえ祭典の雰囲気にひたれるこのとりくみは、今後各地で開催される祭典にぜひ継承させたい。本番の大江戸どんちゃかは、一昨年から三多摩地区１３団体で始まった「歌声どんちゃか」を全都にひろめ３３団体が協賛した壮大なうたう会となり、「一緒に歌う場があって楽しめた」等、好評な感想が寄せられた企画への評価の一助となった。

＊宣伝について

「東京らしい」祭典をアピールする材料として、２００７年奈良での祭典時から「歌舞伎ロゴ」「祭典キャラクター平九郎（へいくろう）」を生かした「ハッピ」「横断幕」を作成して宣伝を開始した。「横断幕」は布製手作り品からスタートし、コート紙製を３本作り、演奏や催し物の度に活用した。特に大型のものは、大会場での集会や演奏で聴衆の衆目を集めた。

チラシは、２００７年１１月に仮チラシ３０００枚を作成、２００８年４月にカラーチラシ１０万枚を作成した。カラーチラシは、「お江戸」

「今の東京」「うたごえ６０年」と平和憲法を現す「９」のデザインで好評であった。「６０周年記念音楽会」「お江戸のにぎわいコンサート」もそれぞれ独自のチラシを作成し、誘う相手の要求に合わせた宣伝組織に活用された。

メディアでのとりあげは、一般マスコミがなかなかとりあげない東京の困難さがあったが、地域のうたごえ喫茶のとりくみ（どんちゃか）がラジオ番組で伝えられる等間接的効果はあった。「しんぶん赤旗」ではうたごえ６０周年ということで広告、祭典総監督池辺氏の対談記事、祭典のとりくみの特集など、回数多く扱ってもらうことができた。このほか「東京民報」「女性のひろば」「新婦人しんぶん」でも取材され、話題が広がった。

うたごえのメディアである「うたごえ新聞」紙上では、祭典企画を大きく押し出す紙面が頻繁に作られ、歌い手組織・チケット普及や全国の参加運動を盛り上げた。季刊「日本のうたごえ」でも特集が数回組まれ、企画の詳細やうたごえの歴史、祭典への興味や理解が深まる内容が発信された。

宣伝用「清刷」は大小２種類を作成し、労働組合など諸団体の機関紙に掲載してもらったり、サークル・合唱団がニュースやチラシ等に利用したりと「すきま的宣伝物」として効力を発揮した。

ＨＰは、専門の担当者を依頼し、最新情報をこまめに更新し、練習会の情報など祭典参加者に有効活用された。今後の課題として、ＨＰから祭典グッズやチケットが注文できるとか、うたごえ関係者以外の人が見て楽しめる内容づくりなど、充実にむけては集団であたれる体制がのぞまれる。

●運営・事務局

＊運営委員会体制・事務局体制

運営委員会体制は、組織委員会・企画委員会・事業委員会・広報宣伝委員会・財政委員会・うた新拡大推進本部「プロジェクトＹ（わーい）」の６委員会と事務局の７局体制とし、各委員会の委員長及び事務局長で常任運営委員会を構成した。運営委員の選任にあたっては、意思伝達、運動の展開が計りやすいよう、東京の通常の活動基盤の１０ブロックの運動体制を基本に据えた。運営委員会・常任運営委員会をそれぞれ月１回開催し、２ヵ月に一度の実行委員会までの意志決定の場とした。

事務局会議は月１回、後半は月２回を定例化し、祭典の準備にあたった。また、２００７年４月からは、各委員会の事務局長をメンバーとして部局長会議を定例で行い、事務的な課題を明確にし準備をすすめてきた。しかし１万人の祭典を準備する体制としては、人手不足であり、その分を青年のうたごえのメンバーが、アルバイトを含めカバーをしてくれた。祭典前３カ月間、常に事務所に青年が結集し、実務作業にあたってくれた力は大きい。

祭典運営委員会ニュースとしての「運営かわら版」は、前半は各ブロックの取り組みの交流も含め発行。後半は組織ニュース、企画ニュースとの役割分担で、運営委員会の決定の伝達、事務連絡等を中心にして課題を明確にして発行した（全１５号）メール・郵送で各団体、１０００人実行委員へ届くよう配慮したが、サークル全員まで届けきる点での体制が弱く各団体の担当者任せになったきらいがある。今後東京の活動の中でこの点を改善していく必要がある。

＊当日体制について

当初、外部団体へ要員の依頼を試みたが、実行委員会団体に加わってもらう等の準備が充分できず、最終的にはうたごえの人員を中心とした体制をとらざるをえなかった。事務局の中に、当日体制を準備する部署を確立できなかったことも、準備の遅れに影響した。また当日の交通手段や移動に対応する「交通委員会」のような部署も必要であった。このような条件もあり、大音楽会当日のシミュレーションをしっかりと行う

ことが出来ず、一万人を迎える体制としては手薄であった。そのため、参加者のみなさんにご迷惑をおかけした部分もあったが、実行委員団体として要員を送り出してくれた新日本婦人の会中央本部、また全国の皆さんをはじめ多くの方々の協力を頂いてなんとか乗り切ることが出来た。有明コロシアムの暖房については、天候の予測と会場側への暖房依頼の判断が遅く、参加者の方に大変寒い思いをさせてしまったことを反省したい。

＊財政総括

祭典財政は、チケット・賛同金・事業収入を基本に構成した。特に賛同金は祭典財政を支える上で、重要との位置づけで、一般賛同金（１口１０００円）は準備段階から、特別賛同金（１口１万円）は実行委員会発足の２００７年９月より取り組み、各ブロックで目標を持って展開した。その結果、地元東京は目標の６５０万を超過達成、全国も目標を達成し、祭典運動を大きく励ました。チケット普及は予算目標の７５００枚を達成し、財政の根幹を支えた。またお江戸のにぎわいコンサート、記念音楽会とも目標を達成し、祭典財政に大きく貢献した。事業収入では、プログラム広告は、東京は取り組みが遅れ目標を達成出来なかったが、その分祭典グッズの奮闘によりカバーするなど健闘だった。全体として支出を抑えながら、健全財政を生み出すことが出来た。

●おわりに

１０年ぶりの祭典、自分たちの力で成功できた、という実感がどの実行委員の胸にも湧き上がっていることと思う。

「一人ひとりが自らのこととして」とりくもうとかかげ、自分たちの思いややる気、やりたいことを大切にすることをぶれずに貫いてきた。その結果、企画では「東京らしさ」や「６０周年の蓄積」が鮮明に伝わり「うたごえはこんなにすごいことをやってきたんだね」「初めて参加したが、うたごえのあゆみがよくわかった」等の感想を寄せてもらえる成果につながった。また「今、日本でこの規模の文化的企画を成功させた力はすごい。平和や暮らしを守る様々な運動を励ました！」と協力を頂いた団体の方からも評価をいただいている。

そして「東京がひとつ」になってとりくめたことが今後の東京のうたごえの道を照らしている。新しいサークルやうたう会ができ、協議会加盟サークルも増えた。地域協議会づくりも「つくらねば…！」ではなく「つくりたい、連帯し集える場がほしい」という要求やよろこびに根ざした建設の展望が見えてきた。この成果を生み出した東京の仲間の奮闘を本当に誇りに感じる。そして実行委員会を支え協力してくれたたくさんの団体のみなさん、全国のうたごえの仲間に今一度感謝の意を表したい。これからの活動の中で祭典で得た力を活かし、人間が人間らしく生き輝ける時代を東京からつくりあげたいと決意を新たにしている。

働き　生きる希望　心つなぐ歌を

09年活動方針

６０周年を経て０９年は、貧困と格差社会の進行に対し、雇用とくらし、いのちと平和を守れ、２００９年を「変革の年」に！　の声が広がっている。その声を、思いをつなぎ、人権、平和、民主主義が輝く時代を未来に手渡すために、共同・連帯するうたごえが求められている。

０９年の運動をすすめるにあたって、あらためて４０周年運動でかかげたうたごえ運動「４つの基本精神」（㊦項）を受けつぎ、新しい時代にふさわしく、一層輝かせていきたい。

０９年、活動の重点は

第１に、金融危機・不況、大企業の非正規雇用解雇、派遣切りのなか、その不法、横暴を許さない、平和のうちに働き、生きる思いを歌にして広げる。

第２に、九条を守り生かす国民的な運動の広がりの中で、九条の会とむすび、うたごえ、音楽九条の会をつくり、憲法の心を歌いひろげる。

第３に、戦争も核兵器もない平和な日本と世界をめざすうたごえを響かせ、２０１０年春の核不拡散条約（ＮＰＴ）再検討会議にむけ、大代表団を送る運動を進める。

第４に、地方・産業別の祭典運動、合唱発表会運動を発展させ、京都での日本のうたごえ祭典を全国の連帯で成功させる。

第５に、以下の日常活動を発展させる。

・人々の願いや思いを歌った歌を創る。

・創ったうたを歌い交わし、多くの人にとどける演奏・普及活動を活発にする。

・歌の広がりをうたごえ新聞や協議会で結び、うたごえの組織を大きくする。

・次代を担うリーダーづくりと教育・学習運動を活発にする。

方針〈1〉　人々のねがいを結び、歌いつがれてきたうたを歌い、創り、「みんなうたう会」を旺盛に展開し、〝共に生きる町づくり・地域づくり〟のうたごえを広げる。

全市区町村、わが町・わが暮らしに、世界の羅針盤、平和憲法・九条をまもるうたごえを響かせる。

①〝いつでもどこでもうたごえを〟を合言葉に一人・合唱・器楽、・和太鼓と民謡・民舞…多種多様な形態で大勢の人とともに歌う喜びをひろげる。

◎失業、貧困、格差とたたかう人びとと連帯するうたごえを国のすみずみから起こすとともに、特に、たたかう労働者と連帯するうたごえを意識的にすすめる。

◎サークル・合唱団、協議会で〝うたごえ九条の会〟をつくり、音楽家、音楽愛好家とともに〝音楽・九条の会〟をつくり、８０００近くの地域、職場、分野別の〝九条の会〟にうたごえを届けながら、さらに運動を広げる。

◎すべてのサークル・合唱団は旺盛な演奏普及活動を行い、全市区町村で〝みんなうたう会〟を計画を持って実践する。

②多くの人が〝こぞって歌える〟愛唱歌を創りだす創作運動を活発にする。

◎「労働者の使い捨ては許さない。新しい働くものの連帯の歌を創る」活動を全国のサークル、合唱団で取り組む。

◎うたを創り、生まれた作品を歌い、〝みんなでつくり歌う運動を広げ、創り手を生み出し、創作活動と作品交流を活発にする。創作合宿の発展、創作講習会開催の計画を持ち、〝日本のうたごえ創作センター〟を軌道にのせ、オリジナル・コンサートを充実させる。

③うたごえ運動６０周年記念企画〈～うたは歴史を刻む～「うたごえと日本の作曲家たちコンサート」〉を成功させる。

④歌う喜びを出発点に、いのちや音楽の輝きを人々に届ける豊かな演奏創造を発展させる。

～４つの基本精神～

（うたごえ40周年運動方針より）

①私たちの生活をおびやかし、平和と民主主義を奪おうとするものにたいして、平和で豊かな生活を願うすべての人びとと手をつなぎ、そこからいつも学び、高めあい「うたごえは平和の力」「うたはたたかいとともに」「うたごえは生きる力」の活動を力いっぱい実践していくことです。

②うたごえ運動の生命である〝一人ひとりが太陽〟〝国民が主人公〟の音楽活動を、あらゆる場で貫き、輝かせていくことです。

一番苦しんでいる人、一番大変な悩みを持っている人を大切にし、そんな国民一人ひとりを主人公にした創造活動がよりすばらしく実現できるよう、音楽を愛するすべての人たちに呼びかけ、連帯し、学び合って行くことです。

③人びとの生活やたたかいの中できたえられた日本人の美点―素朴さ、誠実さ、謙虚さ、あたたかさ、そして、たくましさ、勇気などを活動の中で学んでいくことです。

うたごえ運動の歴史にも蓄積された国民の優れた財産に学び、魅力的な創り手、魅力的な広め手になるために、私たち一人ひとりの力量を高め、うたごえ運動を量の上でも、また、質の上でもさらに、〝感動あるもの〟にしていきましょう。

④今、この日本に生きている国民のさまざまな想いを、くらしと生活の場から雄雄しく、あたたかくうたいあげていく創作活動をとりくむことです。

荒木栄の作品をはじめ、私たちはすでに、働くものの現場から〝燃える心〟をうたいあげた数々の名曲を持っています。人々のくらしの中にある「燃える想い」を全身で感じとり、私たちのこのかけがえのない生命、くらし、夢、希望をたくして明るくうたいあげる歌の数々を生み出し、うたい拡げる活動に取り組みましょう。

方針〈2〉合唱発表会を地方、産業別、全国とも活発にし、歌う活動の実際を交流し、学び合い、創造の前進をめざす場にする。

①合唱発表会を協議会活動の年間活動の柱に据え、演奏・講評を通じて交流し学び合うという発表会の原点をいっそう輝かせる。広く参加団体を呼びかけるとともに、開催の仕方、運営を工夫し、豊かな交流ができる合唱発表会をづくりをめざす。

合唱発表会参加団体を１３００団体に、未開催県の今年度開催計画を持つ。

③全国合唱発表会のありかたについて、全国の知恵をあつめさらに改善していく。

方針〈3〉地方祭典の全都道府県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画を持つ。

①うたごえを起こし、新たな発展をめざすとともに、「うたごえ祭典」の役割を輝かせ、地域、都道府県、産業別、階層別祭典を活発にし、祭典運動の新たな前進をめざす。

②２００９年日本のうたごえ祭典・京都を全国の連帯で成功させる。

①２０１０年日本のうたごえ祭典ｉｎ長崎（仮称）開催の準備を進め、それ以降の祭典計画を持つ。

方針〈4〉歌の広がりをうたごえ新聞読者につなぎ、豊かな〝うたごえ発ジャーナル〟を確立する。

今、生きる人々の願い・思いを歌にしてつなげるうたごえ運動の魅力を伝える〝うたごえ発ジャーナル〟、その役割を一層輝かせ、豊かな紙面作り、読み・広げる活動を展開する。うた新フォーラム全都道府県開催とうた新まつりを計画し、最高時の読者を迎える。

季刊「日本のうたごえ」の位置づけを高め、加盟員全員購読を積極的にすすめ、新読者を１５０人増やす。

方針〈5〉うたごえ出版物をより多くの人にひろめる。

①すべての協議会加盟団体に事業担当を置き、事業普及活動を活発にすすめる。

②音楽センター出版物をはじめ、各うたごえ出版物の旺盛な普及活動を進める。

方針〈6〉演奏・創造を発展させ、また、運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育をすすめ、次代を担うリーダーづくりを計画的にすすめる。

それぞれのサークル・合唱団・協議会での教育を日常の練習や実践の中で行うことを重視するとともに系統的に各種講習会への参加を強める。演奏・創造活動を豊かに発展させ交流し、批評活動や運動の理論活動をすすめ、力にしていく。

①教育・学習運動を活発にし、次代を担うリーダーづくりを計画的にすすめる。

②各種全国講習会へのサークル・合唱団からの参加を強める。

③日本のうたごえ祭典への歌って参加の活動を、地域、ブロック、産業別、分野で起こし、合同企画等への参加を強め、創造的連帯活動を前

進させる。

④合唱指導者懇談会の開催、指揮者教育者会議（グループ）の結成、指揮者連絡会等、教育システムの組織化をすすめる。

方針〈7〉青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめ、次代を担う青年をたくさん迎える。

①青年の要求に敏感に目を向け、仲間づくり、サークルづくりと団体・分野を越えたネットワークづくりを強める。

②「運動する力」「音楽する力」をつける「学びの場」を系統的につくる。

②青年学生部を充実させ、全国を視野に入れた青年のうたごえの連帯を強める。

方針〈8〉　サークル・合唱団をつくり、大きくし、うたごえ協議会の強化と建設をすすめる。また、ブロックの連帯活動を活発にするため、ブロック連絡会づくりを強める。

サークル・合唱団を新しくつくり、サークル・合唱団員を増やし、合唱発表会参加団体、協議会加盟団体、うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」の読者を増やすことを目標持って計画的にすすめる。

合唱発表会参加団体を１３００団体に、加盟団体を５００団体にし、うたごえ協議会のない都道府県のうたごえ協議会の確立目標を持つ。最高時のうたごえ新聞読者拡大を今年度総達成する

方針〈9〉　〝郷土のうたと踊り〟を活発にし、専門家との協力協同、全国講習会の充実、和太鼓と民舞のまつりの全国展開プラン、まちおこし、まちづくりにつながる活動を計画を持ってすすめる。

方針〈１０〉　世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪を広げる。

韓国３・１独立運動９０周年記念歴史認識の共有と平和のための「シンポジウムと文化交流の旅」はじめ、アジア、ラテンアメリカ、世界への交流の輪を広げる。

おわりに

想像してみよう　貧困のない社会を。想像してみよう、子どもたちの笑い声があふれる社会を。そして、感じよう、今私たちの隣に居る人の願いを。

私たちは歌を通して人々の願いをつなぎあってきた。そして、今、新たに私たちの前に立ちはだかる問題に目を向け、時代が求める声を聞き取り、歌にし、その輪をさらに大きく豊かに広げ、新しい歴史の流れを創っていこう。

◆２００９年主な年間活動

①日本のうたごえ祭典・京都　１０月２３日（金）～２５日（日）

②地方祭典・合唱発表会

地方合唱発表会は９月２３日までに終了。

祭典：北海道（９／１９～２０札幌）、九州（９／２６～２７大分）、長野（８／９）、愛媛（９／６）　２月20日現在

③産業別・階層別うたごえ祭典・交流会

港湾（富山予定）、教育・広島（８／２２～２３）、青年（８／２９～３０長野）、郵便（９／５東京）、医療（９／１２長野）、国鉄（９／２２～２３京都）、電通（９／２６～２７兵庫）、自治体（１０／４岡山）、保育（１１／２１愛知）、私鉄（検討中）、関東交流会（５／３０～３１茨城）、東北交流会（６／２７～２８宮城）

④全国講習会

全国合唱指揮・指導者講習会　（６／１９～２１　長野・松本）

西日本合唱講習会　（５／５～６　京都）

東日本合唱講習会　（５／１６～１７　東京）

東日本郷土講習会　（５／２～３　神奈川）

⑤３・１ビキニデー　（２／２８～３／１　静岡）

⑥原水爆禁止世界大会　（８／４～６広島、７～９長崎）

⑦第５４回日本母親大会　（７／２５～２６　京都）

⑧日本平和大会　（１２／１１～１３　神奈川予定）

⑨日本高齢者大会　（９／１４～１５　大分）